

雑誌『女学世界』に見る女性たちのキャリアデザイン
— 明治後期を中心として —

How the Women Make Their Career at the End of Meiji Era?:
Focusing on the Career Information in the Journal , “Jogaku Sekai”

石渡 尊子

ISHIWATA Takako

キーワード： キャリアデザイン、女子教育、女性の職業、良妻賢母、ライフコース

はじめに

『女学世界』¹は、「驚異」とされるほどの売り上げを記録し、本格的な商業誌として成功した初の女性雑誌と評価されている雑誌である。本稿は、『女学世界』をとりあげ、この雑誌メディアの発信する情報が明治期の女性のキャリアデザイン形成に、いかにかわったのかを実証的に解明することを試みる。

1901(明治34)年に発刊された『女学世界』は、1925(大正14年)までの25年間に全350号が刊行された。誌上には、論説、古典文学の講義、学校情報、職業情報、家庭や流行に関する実用記事、社交術、娯楽(あそび)紹介、伝記、読みきりや連載小説、和歌、読者の投稿欄など、女性に関する記事が幅広いジャンルにわたって掲載されていた。

ところで、『女学世界』が発刊されていた25年間とは、どのような時代であったのだろうか。

この時期、我が国では、日露戦争と第一次世界大戦を経て産業がめざましく発達し、その中で女性の職業分野もひろがっていった²。他方、1898(明治31)年の民法制定により、女性を含めた家族全員を戸主に従属させようとする「家」制度の徹底が図られていた時代でもあった。夫は妻の財産を管理し、また財産相続についても、女性の財産権は非常に弱いものであった。つまり、女性は「無能力者」として位置づけられていた。一方、1900年前後には、産業の発達により都市部に核家族(「家庭(ホーム)」)を形成する「新中間層」も登場し、いわゆる「主婦」もこの頃に誕生した。家庭が女性の領域であるとされ、男は仕事、女は家庭という性別役割分業が浸透していった時期であった。

また、女子教育のあり方についても上述のような社会的・経済的な変化が直接に影響を与えることとなった。

明治後期には、女性が小学校教育を受けることは「当たり前」となり、女子中等教育も制度化され本格的に開始された。具体的には、高等女学校の制度的な整備とその普及によって、女性の義務教育以上への進学欲求を満たしただけでなく、社会的自立や社会的活動への欲求の高まりにつながっていった。

ただし、女子が進学した学校で行なわれていた教育は、周知のように「女性は『家』を守るべし」という「良妻賢母」の思想の内面化と、資本主義経済発展に必要な安価で従順な労働力の養成とを指向するものでもあったことには注意を要する。実際に、高等女学校における家事、裁縫を中心とした教育内容や、卒業後は家庭に入り妻となるというライフコースに納得できず、より高度な普通教育や専門教育を経て、しかるべき職業に就くことにより、自立して社会に貢献することを希望する女性たちもまた増加する時期でもあった。

一方、日清、日露戦争による戦争寡婦、戦後の不況からの生活難は、新中間層の家庭においても進行し、女性の職業分野の拡大とともに、生活のために経済的自立の途を求める女

性のニーズに応えるための職業学校の数や種類も増加していった³。これらの事情から学校教育を終了してから結婚までの間、社会に出て就業する女性や結婚をしても仕事を続けるライフコースの登場、また「職業婦人」という言葉であらわされるような、職業をもつ女性という新しい生き方も社会的に認容されていくようになる。

このように、『女学世界』が刊行されていた明治後期から大正期は、産業の発展、新しい家族形態の誕生、女子中等教育の制度的な開始とその拡大により、女性の教育や職業のキャリアパスに多様性が見えてくる時期であった。そのような時代に『女学世界』は、どういった女性たちを対象に、どのようなキャリアデザイン⁴の情報を発信し、どのような将来像や理想の女性像を打ち出していたのだろうか。また、3つの戦争をはさんで、産業の発展と家庭像の変化をもたらしたこの25年の間に、発信された情報内容には何らかの変化が見られるのだろうか。その一方で、読者である女性たちは、『女学世界』の記事からどのような学校情報や職業情報に出会い、何に気づき、どのような女性の生き方を見いだして自らのライフコースをたどっていったのだろうか。

こうした問題意識の下、本稿は、その第1報として、『女学世界』の書誌的情報を整理するとともに(第1章)、後述するように各記事が「論説」「講義」「技芸」「学術」「小説」といった項目別に構成され、また啓蒙的な色彩が強い記事内容になっていたとされる刊行初期(創刊から第7巻第16号)の全112冊に着目して、そこで発信されていた女性像(第2章)とキャリアデザイン情報(第3章)について見ていきたい。

第1章 雑誌の概観

1. 発行状況・部数・読者層

『女学世界』を刊行した博文館は、「明治の最大の文化産業というべき出版の企業の雄」といわれ⁵、1895(明治28)年に初の総合雑誌『太陽』(～1928(昭和3)年)を刊行した明治期の我が国での最大の出版社である。同社は、すでに女性向け雑誌として『日本之女学』(1887(明治20)年9月～1889(明治22)12月)、『婦女子』(1890(明治23)年12月)創刊、『婦女雑誌』(1891(明治24)年1月～1894(明治27)年12月)を発行しており、その後の継雑誌として『女学世界』を刊行した。加えて同社は、『○○世界』と名づけた読者層を明示した雑誌を1885(明治18)年から次々と刊行しており、『女学世界』はその4番手として創刊された⁶。

創刊から16年間の編集を務めたのは、明治中期の東京下層社会の実態を綴った『最暗黒の東京』(民友社、1893(明治26)年)の著者でもある松原岩五郎(号名:二十三階堂)であった。松原は、1895年に国民新聞社に入社し、日清戦争の従軍記者ともなり民情を含めた戦記『征塵余録』(1896(明治29)年)を著した。この間、『太陽』(博文館)にも、紀行文を寄稿していた。こうした業績を評価され、1900年に旬刊誌『東洋戦争実記』の編集主任として博文館に正式入社したが、北清事変の終結とともにわずか3ヶ月(7月～10月、第10号まで)

で終刊となったため、翌年1月創刊の『女学世界』の担当となった⁷。

『女学世界』は、創刊(1901(明治34)年1月)から終刊(1925(大正14)年6月)までの25年間、月刊誌として計291号、増刊号として計59号の計350号が刊行された。そのすべてが現存している。この間、第23巻(1923年)は、関東大震災により博文館が焼失した影響を受けて、第12号が休刊になったため第11号までの発行であった。また第25巻(1925年)は、6月で廃刊になったため6冊の刊行となった。増刊号は、創刊当初から13年間は年に3回発行、続く2年は年2回発行、またその後1年は1回のみ発行され、残りの9年間は発行されていない。増刊号の発行状況に着目して整理すると以下ようになる。

- ① 1巻1号(明治34)～13巻16号(大正2) 毎月1回、年4回増刊、年間16冊
- ② 14巻1号(大正3)～15巻13号(大正4) 毎月1回、年3回増刊、年間15冊
- ③ 16巻1号～13号(大正5) 毎月1回、年1回増刊、年間13冊
- ④ 17巻1号(大正6)～25巻6号(大正14) 毎月1回、増刊なし、年間12冊

価格は、創刊号(全208頁)の奥付によれば、「1冊20銭、4冊(3か月分)前金75銭、8冊(半年分)前金1円45銭、16冊(1ヵ年分)前金2円80銭(内 定刊数12冊、増刊4回3,6,9,11月価格同一)、郵税1冊2銭」となっており、終刊(全152頁)時には1冊40銭であった。全巻号を通じて表紙は色刷りであり、口絵、写真や書画の手本等工夫が凝らされていた。巻頭グラビアには、刊行初期の皇族の姫宮、華族の夫人、令嬢の肖像などが数ページにわたって入っており、また口絵や竹下夢二による挿絵などもあったことから、同時期に同出版社から刊行されていた雑誌に比べて多少割高に設定されていたと考えられる⁸。

発行部数については、はっきりした記録は残っていない。しかしながら、『博文館五十年史』には、「或時は多くの本館発行雑誌中首位を占むるほどの大部数を発行した」⁹と記録され、また小川菊松によれば、1900年代後半においては、「雑誌の発行部数というものは、せいぜい二千から三千部が普通で、一方、売れるなど思うものが、七、八千部から一万部前後であるのに」、『女学世界』は、七、八万を売って世の驚異とされていた¹⁰という。また、1911(明治44)年4月12日『東京朝日新聞』は、東京市内の3つの書店の売れ行き状況を公表し、女性雑誌の人気ランキングも記載している。その順序は、①『婦人世界』②『女学世界』③『婦人画報』④『婦女界』⑤『少女世界』⑥『少女の友』⑦『婦人界』⑧『婦人くらぶ』⑨『少女文壇』⑩『家庭の友』⑪『婦人の友』⑫『少女界』⑬『婦人の鑑』⑭『女学生』⑮『少女』⑯『新女学』⑰『ムラサキ』と示されている、(傍線筆者)。

読者層は、この時期増大し続けた女学生が中心であったものの、主婦、既婚女性まで幅広く、はては男子学生まで含まれていたという¹¹。1909(明治42)年の女学生対象の雑誌購読調査においては、『少女世界』『少女の友』などの少女雑誌以外で、『女学世界』がもっともよく読まれていたという記録も存在する¹²。また、永峰重敏は『雑誌と読者の近代』の中で、戦前期に行なわれた雑誌購読に関するさまざまな調査を一覧表に整理しており、特定の読者集団における婦人雑誌の購読割合と普及状況を明らかにしている¹³。それによると、1914(大正3)年頃に行なわれた高等女学校生を対象とした2つの購読雑誌調査では、『女学

世界』は「1位」と「3位」という上位を占めている。続く1919(大正8)年の女工を対象とした4つの調査になると、「3位」を記録したのが2調査、「7位」を記録したのが2調査であった。また、1922(大正11)年に行われた職業婦人に対する調査では、「5位」であった。これらのことから『女学世界』は、多数かつ多様な読者を抱える我が国初の本格的な女性商業雑誌であったと言えるであろう。

ところで、『女学世界』の執筆者数は、明治期発刊分だけでも2,480名を超え、その立場は著名な教育者、文学者、歌人、政治家など多岐にわたっていた。多彩な執筆陣が「『女学世界』はほかに比べて教養的」との評判¹⁴につながり、当時の女性たちの高まる教育欲求に応えることができた理由とも考えられる。

ただし、時代が下るにつれて、発行部数は減少していったようである。先の永峰による戦前期の雑誌購読調査結果の一覧表によると、1924(大正13)年の職業婦人に対する調査では「15位以下」となっていたことがわかる。しかしながら、この結果だけからは、職業婦人が『女学世界』を好まなかったとは一概に言えないだろう。1910年代以降の出版界においては、女学生、主婦、職業婦人など、読者層の属性を意識した雑誌や、論壇誌、文芸誌、実用雑誌など、掲載記事内容を絞り込んだ雑誌も次々と創刊されるようになり、それぞれ部数を伸ばしていた。その中で、「総合雑誌」という多様な記事を扱い、読者層も多様であることを意識した性格を持って刊行してきた『女学世界』は、次第に時代のニーズに合わなくなったということではないか。最終刊であった、第25巻第6号の編集後記に、当時の編集者であった岡村千秋は、「移り変わる時代の中で読者の趣向の変化について行けず、人気を無くした」と述べ、同館から発行中の『家庭雑誌』(1915(大正4)～1926(大正15)年)と併合して、婦人雑誌会に面目を新たに活躍するとして本誌の終刊を告げている。女性のライフコースの多様化が進んだ時代に、女性雑誌もまたそれぞれ属性にあった記事構成にし、多様化する必要があったのかもしれない。

2. 発刊の趣旨と背景

それでは、『女学世界』はどのような意図で創刊されたのだろうか。創刊号(1901(明治34)年1月号)の冒頭の「発刊の辞」には、

教育はひとり政府にのみ依頼すべきものに非ず、又学校のみ依頼すべきものに非ず。弊館茲に本誌を発刊せむとするは、方今の女子教育の欠ける所を補はむとするの微衷に他ならず。遍く女子教育に経験ある諸大家の寄稿を仰ぎ、あらゆる女子に必要な事柄を網羅し、学を進め、智を開くと共に、其徳を清淑にし、其情を優美にし、家政に通曉せしめ、女子に必要な芸能を自得せしめ、以て賢母良妻たるに資せむと欲す。日本には、日本女子の美德美風あり。妄りに外国を模擬すべからず。また女子は学芸のみに偏すべからず、良妻たり、賢女たり、家政の主配者たるの覚悟最も必要也。これ本誌の意を致す所也。願はくは遍く日本の家庭に入りて、其友となり、其忠告者となり、其慰藉者となる

を得む。

とある。智・学・徳・情をそなえ家政をつかさどる良妻賢母の養成を目的としていることがわかる。また、「女子教育に経験のある諸大家の寄稿を仰」ぐとあるように、創刊号の最初の記事は西村茂樹による「女子の三大育に就て」から始まり、刊行初期の執筆者を見ても、下田歌子(第1巻第1号初出)、塚本はま子(第1巻第1号初出)、棚橋絢子(第1巻第2号初出)、成瀬仁蔵(第1巻第3号初出)、安井哲(第1巻第6号初出)、新渡戸稲造(第1巻第7号初出)、田島秀子(第1巻第7号初出)、田島秀子(第1巻第9号)、三輪田真佐子(第1巻第16号初出)、津田梅子(第2巻第2号初出)、嘉悦孝子(第2巻第14号初出)、羽生もと子(第3巻第1号初出)など、学校関係者や女子教育機関の設立や運営に携わっていく人物たちが記事を寄せている。

『女学世界』の創刊された1901年は、高等女学校規程の制定(1895(明治28)年)、高等女学校令公布(1899(明治32)年)、同施行規則の制定(1901(明治34)年)と、高等女学校制度が整備された時であり、その後の拡大が目覚ましいことは周知の通りである。1903(明治36)年に高等女学校は、すべての府県で設置され、1900(明治33)年に11,984名(52校)だった生徒数は、1905年(明治38)には、31,918名(100校)、1910(明治43)年には、56,239名(193校)、1920(大正4)年125,588名(336校)、終刊時の1925(大正14)年には275,823名(618校)と急増した。それより先、小学校の女子の就学率も、1897(明治30)年にようやく50%を超えたにすぎなかったものが、1901年には80%を超え¹⁵、小学校教育を受けることは当たり前になってきていた。つまり、『女学世界』の刊行されていた時期は、女性も大半が文字を読み書きできるようになっており、読書人口が著しく増加していきときであった。確かに、この時期に創刊された婦人雑誌は多く、『婦人世界』(1901年創刊)、『婦人界』(1902年創刊)、『家庭雑誌』(1903年創刊)、『家庭之友』(1903年創刊)など、明治期だけでも150ほどにのぼった¹⁶。

ちなみに、先の「高等女学校令」では、男子の中学校が5年制であるのに対して、高等女学校は原則として4年制であり、教育目的も中学校は、学問と知識を与えることが主たる目的であるのに対して、高等女学校では、家庭の良妻賢母として位置づき、維持できるようしつけるというものであった。

同様の特徴は、カリキュラムにもあらわれる。外国語は、中学校では34単位、女学校では12単位、数学は、中学校20単位、高等女学校8単位であった。その代わりに高等女学校では、家事・裁縫が16単位分設定されていた。修身の教育内容についても、中学校とは異なっていた。「家族に対する責務」という項目において、中学校の場合は、最初に父母について教え、次いで男の兄弟、そして姉妹、さらに子女、最後に夫婦と教えるが、高等女学校の場合には、最初に父母、次に舅姑、3番目に兄弟姉妹、4番目に夫婦、最後に子女となっていた。これらのことから、高等女学校が家中心の考え方で教育を行なっていることがわかる。富国強兵という国の大方針の下、家族制度が強化され、女性は家庭の中にいるべ

きだという体制側の考えが現れている。高等女学校教育の普及により、女性の知的要求や水準を高めているとはいうものの、こうした家父長制的家族観、男女観を浸透させる役割を果たしていったことも事実である。

一方で、我が国における女子教育は、宣教師たちの手によるミッションスクールや日本人自身のキリスト教主義教育の女学校という形で広がってきており、高等女学校の設立・拡大の中で、1900年には津田梅子による女子英学塾の開校、翌年の4月には、日本女子大学校、女子美術学校、東京女子医学校など女子の高等教育を行なう機関も設立されている。

3. 構成の変化とその特徴

『女学世界』の誌面構成についてみていこう。

小山静子は、『女学世界 明治期復刻版 解題』（柏書房、2005年）において、1901（明治34）1巻1号～1907（明治40年）7巻16号までは、項目別の誌面構成をとっており、総じて、啓蒙的な色彩が濃く、記事の内容は多岐にわたり、論説文、読み物、実用記事などを中心に、女性が興味・関心をもつあらゆる事項を盛り込んだ、まさに総合雑誌であったと述べている¹⁷。「論説」には、先の子教育の発展に貢献した創刊初期の執筆陣のほかに、板垣退助、棚橋絢子、安井哲などが名を連ねている。また、古典文学の講義の執筆者には、大町桂月、久保天随、塩井雨江、「史伝」には、中村秋香、中内蝶二、塚越停春などが登場している。その他、伝記・学術・家庭・小説・文芸・技芸・娯楽・社交・流行・学事、科学、などの多彩な項目にわたる記事が掲載されていた。加えて、初期の増刊号は、そのほとんどが読者投稿による文芸特集となっており、選者に大町桂月、佐々木信綱、坂正臣などがあたり、小説・国文・消息文・和歌・新体詩などが掲載されていた。

数少ない『女学世界』の先行研究のうち、加藤節子は、女子の体育に関する記事の分析を行っている。その中で、第8巻以降誌面構成から項目立てが廃され、種々の記事を配列していることから、それ以後を「中期」（1908（明治41）8巻1号～1907（大正5年）16巻13号）と区分している（第7巻までは「初期」（1901（明治34）1巻1号～1907（明治40年）7巻16号））。小山も、第8巻（1908年）からは、人生訓に焦点を合わせたタイトルが並ぶようになり、社会性が次第に希薄化していることを指摘している。この頃の記事には、家庭内の実務に関するもの、例えば、「女子をして家庭の実務に熟練せしむる法」、「婦人美と服色」、「ストーブの焚き方」、「台所拝見」などが見られ、また有名・無名人の体験・経験談によるさまざまな生活上の対処法等も掲載されるようになる。ただし、こうした実用記事は、「初期」から見られ、例えば第6巻以降、「女重宝記」、「女知恵袋」、「運命開拓法」など、書簡、家事、家庭経済などの実用記事特集などがすでに組まれている。

他方、第15巻（1906、大正4）頃より国木田独歩、巖谷小波、与謝野晶子、武者小路実篤、などの文壇作家が再び参加し始め、1つの号にいくつもの連載小説が掲載されるようになる。それに対して、論説や家政に関する実用記事は減っていくようになる。

さらに編集人が松原岩五郎から岡本千秋に交代する第17巻（1917年）から、誌面が大き

く変化していると小山も加藤も指摘している¹⁸。例えば、連載「女学校通信」、「女子高師受験記」や「女子高師入学試験問題」などが登場するように、この巻以降、女学生を中心とした、より若い層を読者とした誌面作りが進められていることがわかる。先にも示したように、高等女学校への進学者が増大しており、その希望者もまた膨れあがってきたこと、また中等教育を受ける女性たちが小学校卒業者の1割を超えるようになり¹⁹、中等教育を受けることが珍しいことではなくなってきたことも影響しているのであろう。また小山は、職業婦人について情報を提供する記事も増加することを指摘している。たしかに第20巻第8号(1920年8月)からは、「職業婦人から」という連載が始まるようになり、第22巻第3号からは「婦人と職業」と題した医師、歯科医、タイピスト、事務員などに関する具体的な職業紹介記事も存在している。また加藤や高橋一郎²⁰がすでに指摘しているとおり、大正末期のこの頃から女学生のスポーツ選手についての記事など、スポーツ関連記事が増加していくのも特徴である。巻頭グラビアにも刊行初期や中期の上流社会の女性に変わり、一般女学生の運動選手たちが登場している。さらに、第21巻の終わり頃からは、家庭小説、探偵小説など、小説類が大部分を占める誌面構成となっていく。終盤には、初期の論説のように、啓蒙的な内容記事はまったくみられなくなる。

第2章 初期の記事内容と掲げられていた女性像

1. テーマ

それでは、『女学世界』には、実際にどのような記事、そして情報が読者に提供されていたのだろうか。

上述のとおり、創刊から第7巻までの刊行初期は、「項目別」の誌面構成であった。論説、講義、伝記、学術、家庭、小説、文芸、技芸、娯楽、社交、流行、学事といった豊富な項目が設けられ、それら項目の下にそれぞれ1本から3本ほどの記事が並んだ。

それらの記事内容をみると以下の6種のテーマに分けられる(カッコ内は、記事内容例)。

- ① 女性論(女性／婦人とはいかなるべきか、女性の修養、女性の品位とは何か)
- ② 女性像のモデル提示(外国人女性・伯爵・宮家・歴史上の人物・偉人の母または妻の紹介)
- ③ 女子教育(あり方、問題点、課題、諸外国の女子教育の紹介)
- ④ 学校・女学生情報(学校紹介、女学生の生活を知る、女学生のあり方、寄宿舎訪問記事)
- ⑤ 家庭・家族(家事技術、主婦の意義、子育ての意義、家における女性とは)
- ⑥ 職業紹介(業種説明、職業に就く意味)

そのうち、とりわけ、本稿の目的を明らかにするためにも、キャリアデザインという視点(自己発見、学校選択、職業選択、ライフコースの設定)から捉えるために記事タイトルに着目して、一覧にしたものが以下の表「『女学世界』キャリアデザイン関連記事一覧(刊行初期)」である。

『女学世界』キャリアデザイン関連記事一覧(刊行初期)

整理 No.	卷	号	出版 年	年 元号	月	増刊号名	項目名	記事名	筆者	目次 掲載
1	1	1	1901	明治34	1		論説	女子の三大育に就て	西村茂樹	○
2	1	1	1901	明治34	1		家庭	家政学の範囲と婦人の本務	深本はま子	○
3	1	1	1901	明治34	1		雑録	女子教育上の所感	日東散史	○
4	1	1	1901	明治34	1		学事	女子職業学校参観		○
5	1	2	1901	明治34	2		論説	女子の徳義	棚橋絢子	○
6	1	2	1901	明治34	2		家庭	主婦の心得	記者	○
7	1	2	1901	明治34	2		学事	東京女学館参観記	記者	○
8	1	2	1901	明治34	2		学事	東京女学館規則		○
9	1	3	1901	明治34	3		論説	欧米女子大学の形勢	成瀬仁蔵	○
10	1	3	1901	明治34	3		雑録	結婚雑談	浅田空花	○
11	1	3	1901	明治34	3		学事	跡見女学校参観記	記者	○
12	1	3	1901	明治34	3		学事	女子大学校主旨規則	記者	○
13	1	4	1901	明治34	3	壺すみれ	国文	女子の本分	木村花香	○
14	1	4	1901	明治34	3	壺すみれ	附録 名家談叢	日本の女子教育	棚橋絢子	○
15	1	5	1901	明治34	4		家庭	家庭教育に就て	棚橋絢子	○
16	1	5	1901	明治34	4		修身	女徳	野中千代子	○
17	1	5	1901	明治34	4		学事	礼法講習会設立の主旨及規則		○
18	1	6	1901	明治34	5		論説	女子の住める世界	安井哲子	○
19	1	6	1901	明治34	5		雑録	結婚雑談	浅田空花	○
20	1	6	1901	明治34	5		雑録	教育の目的	苦米地日東	○
21	1	6	1901	明治34	5		時論一斑	女子教育に関する意見	吉村寅太郎	○
22	1	6	1901	明治34	5		学事	女子大学参観記		○
23	1	6	1901	明治34	5		学事	高等女学校令施行規則		○
24	1	7	1901	明治34	6		論説	女子高等教育の必要	辻新次	○
25	1	7	1901	明治34	6		家庭	女子の家庭教育	塚本はま子	○
26	1	7	1901	明治34	6		雑録	女子体操学校	苦米地日東	○
27	1	7	1901	明治34	6		時論一斑	欧米婦人談	新渡戸稲造	○
28	1	7	1901	明治34	6		学事	女子美術学校参観記		○
29	1	7	1901	明治34	6		学事	女子美術学校規則		○
30	1	8	1901	明治34	6	花あやめ	名流雑俎	女学士	片山広子	○
31	1	9	1901	明治34	7		家庭	女子の家庭教育	塚本はま子	○
32	1	9	1901	明治34	7		家庭	女学生の経済	桐蔭女史	○
33	1	9	1901	明治34	7		礼法	女子の作法	田島秀子	○
34	1	9	1901	明治34	7		修身	女徳	野中千代子	○
35	1	9	1901	明治34	7		雑録	米国女気質	飯島立峰	○
36	1	9	1901	明治34	7		学事	裁縫女学校の学況並規則		○
37	1	10	1901	明治34	8		論説	仏蘭西の中等社会	野口保興	○
38	1	10	1901	明治34	8		修身	女徳	野中千代子	○
39	1	10	1901	明治34	8		雑録	米国女気質	飯島立峰	○
40	1	10	1901	明治34	8		雑録	結婚叢話	浅田空花	○
41	1	10	1901	明治34	8		雑録	婦人記者	日東生	○
42	1	10	1901	明治34	8		婦人問題	女子及び女子教育		○
43	1	10	1901	明治34	8		婦人問題	当世嫁気質		○
44	1	10	1901	明治34	8		学校案内	女子学院		○
45	1	11	1901	明治34	9		礼法	女子の作法	田島秀子	○
46	1	11	1901	明治34	9		雑録	米国女気質(其三)	飯島立峯	○
47	1	11	1901	明治34	9		学校案内	成女学校参観記及び規則		○

整理 No.	卷	号	出版 年	年 元号	月	増刊号名	項目名	記事名	筆者	目次 掲載
48	1	12	1901	明治34	9	糸すすぎ	名流雑俎	仏国婦人の真相	菅原白峰	○
49	1	12	1901	明治34	9	糸すすぎ	名流雑俎	米国女学生の自活	江湖逸人	○
50	1	13	1901	明治34	10		礼法	女子の作法	田島秀子	○
51	1	13	1901	明治34	10		雑録	露国の女子	森田吐虹	○
52	1	13	1901	明治34	10		学校案内	淑徳女学校の規則		○
53	1	14	1901	明治34	11		修身	女徳	野中千代子	○
54	1	14	1901	明治34	11		礼法	女子の作法	田島秀子	○
55	1	14	1901	明治34	11		雑録	支那の婦女子	西沢公雄	○
56	1	14	1901	明治34	11		婦人問題	婦人労働の罪過	石黒定美	○
57	1	14	1901	明治34	11		婦人問題	下婢の拂底		○
58	1	14	1901	明治34	11		学校案内	東京女医学校概況及規則		○
59	1	16	1901	明治34	12		論説	女智と女徳	三輪田真佐子	○
60	1	16	1901	明治34	12		修身	女徳(寛容)	野中千代子	○
61	1	16	1901	明治34	12		礼法	女子の作法	田島秀子	○
62	1	16	1901	明治34	12		雑録	模範の女学士	日東生	○
63	1	16	1901	明治34	12		社交	北海道の女子教育	下田歌子	○
64	1	16	1901	明治34	12		学校案内	女子実業学校		○
65	1	16	1901	明治35	12		学校案内	女子講習会		○
66	1	16	1901	明治36	12		雑録	女子大学生調		○
67	2	1	1902	明治35	1		修身	女徳(仁愛)	野中千代子	○
68	2	1	1902	明治35	1		礼法	新年の礼法	田島秀子	○
69	2	2	1902	明治35	2		論説	現今の女学生難1	三輪田真佐子	○
70	2	2	1902	明治35	2		論説	女教邇言	津田梅子	○
71	2	3	1902	明治35	3		論説	女子の(手に歸すべき)職業	上田萬年	○
72	2	3	1902	明治35	3		論説	学校教育の習弊	平尾光子	○
73	2	4	1902	明治35	3	若草	名流雑俎	米国婦人の状態	飯島立峰	○
74	2	5	1902	明治35	4		家庭	独逸中等社会の家庭	森山法学士	○
75	2	5	1902	明治35	4		名家談叢	女子非独立談	棚橋絢子刀	○
76	2	5	1902	明治35	4		雑報	台湾士林女学校の卒業式		○
77	2	5	1902	明治36	4		雑報	女子寄宿好学園の設置		○
78	2	5	1902	明治37	4		雑報	女子学院の卒業式		○
79	2	5	1902	明治38	4		雑報	高等學術の講義会		○
80	2	5	1902	明治39	4		雑報	京都淑女学校		○
81	2	5	1902	明治40	4		雑報	女子静修学館		○
82	2	6	1902	明治35	5		雑報	成女学校卒業式		○
83	2	6	1902	明治35	5		雑報	東京女学館卒業式		○
84	2	6	1902	明治35	5		雑報	女子大学創立記念式		○
85	2	6	1902	明治35	5		雑報	帝国女学会の創立		○
86	2	6	1902	明治35	5		雑報	府立高等女学校		○
87	2	6	1902	明治35	5		雑報	女子大学校附自活生		○
88	2	7	1902	明治35	6		家庭	女子の作法	田島秀子	○
89	2	7	1902	明治35	6		雑報	文相の女子教育方針		○
90	2	7	1902	明治35	6		雑報	女子職業学校製品展覧会		○
91	2	7	1902	明治35	6		雑報	華族女学校運動会		○
92	2	8	1902	明治35	6	ほととぎす	彙報	女子夏季講習会		○
93	2	9	1902	明治35	7		論説	女子の独立心養成	武田錦子	○
94	2	9	1902	明治35	7		雑録	女子職業と簿記	土屋長吉	○
95	2	10	1902	明治35	8		雑録	女学史料	石井研堂	○

整理 No.	卷	号	出版 年	年 元号	月	増刊号名	項目名	記事名	筆者	目次 掲載
96	2	11	1902	明治35	9		論説	婦人の生涯	三輪田真佐子	○
97	2	11	1902	明治35	9		雑録	婦人と職業	江湖生	○
98	2	11	1902	明治35	9		彙報	東京女学校		○
99	2	11	1902	明治36	9		彙報	三輪田女学校開校式		○
100	2	12	1902	明治35	9	もみぢ	彙報	女学生の不品行に就て		○
101	2	13	1902	明治35	10		雑録	日本婦人と西洋婦人	菅原白峰	○
102	2	13	1902	明治35	10		雑録	婦人と職業(三)	江湖生	○
103	2	13	1902	明治35	10		彙報	女子学芸講習会・女子大学の近況 その他		○
104	2	14	1902	明治35	11		雑録	米国に於ける女子の職業	飯島かね子	○
105	2	14	1902	明治35	11		婦人と職業	婦女子の内職		○
106	2	14	1902	明治35	11		彙報	日本女子大学校運動会		○
107	2	14	1902	明治35	11		彙報	女学校巡視の一段落		○
108	2	15	1902	明治35	11	冬木立	彙報	女子美術学校落成式		○
109	2	15	1902	明治35	11	冬木立	彙報	成女学校記念祝賀会		○
110	2	15	1902	明治35	11	冬木立	彙報	女学生の倫理思想		○
111	2	15	1902	明治35	11	冬木立	彙報	女学生の趣向		○
112	2	16	1902	明治35	12		論説	家庭時言	大町桂月	○
113	2	16	1902	明治35	12		家庭	主婦の心得	石原笠軒	○
114	2	16	1902	明治35	12		史伝	北条時宗夫人	須藤求馬	○
115	2	16	1902	明治35	12		学海	米国の高等女学校		○
116	2	16	1902	明治35	12		学海	女子大学の寄宿舍		○
117	2	16	1902	明治35	12		名家談叢	女学生の墮落問題		○
118	2	16	1902	明治35	12		名家談叢	女学生の風紀矯正に就て		○
119	2	16	1902	明治35	12		婦人と職業	婦人内職のしをり		○
120	2	16	1902	明治35	12		婦人と職業	婦人の煙草賃巻		○
121	2	16	1902	明治35	12		彙報	明年度開校の女学校		○
122	2	16	1902	明治35	12		彙報	女子東京美術学校開校式		○
123	2	16	1902	明治35	12		彙報	家事科試験問題の合格者		○
124	2	16	1902	明治35	12		彙報	婦人労働者の数		○
125	3	1	1903	明治36	1		論説	偉大なる国民たれ	成瀬仁蔵	○
126	3	1	1903	明治36	1		雑録	婦人と商売	篠田胡蝶	○
127	3	2	1903	明治36	2		論説	女子のつとめ	棚橋絢子	○
128	3	2	1903	明治36	2		雑録	伯林娘気質	巖谷小波	○
129	3	3	1903	明治36	3		雑録	伯林娘気質	巖谷小波	○
130	3	3	1903	明治36	3		雑録	下婢学校参看記	石井研堂	○
131	3	4	1903	明治36	3	花にしき	課題文 (賞外若干種)	女子と学問	酒井つや子	○
132	3	4	1903	明治36	3	花にしき	附録	美術家の妻	藤本夕●	○
133	3	4	1903	明治36	3	花にしき	附録	貧婦の貞操	若柳燕嬢	○
134	3	4	1903	明治36	3	花にしき	彙報	高等女子実習学校		×
135	3	4	1903	明治36	3	花にしき	彙報	各婦人の面接日		×
136	3	4	1903	明治36	3	花にしき	彙報	維新の女丈夫 (岩倉公母堂の逸事)		△
137	3	4	1903	明治36	3	花にしき	彙報	日本淑女学校		×
138	3	4	1903	明治36	3	花にしき	彙報	東京淑女学校		×
139	3	4	1903	明治36	3	花にしき	彙報	東京女学校		×

整理 No.	卷	号	出版 年	年 元号	月	増刊号名	項目名	記事名	筆者	目次 掲載
140	3	4	1903	明治36	3	花にしき	彙報	私立済美学校の設立		×
141	3	5	1903	明治36	4		江湖	米国女生徒の生活	桜田節彌夫人	○
142	3	5	1903	明治36	4		家庭	独逸の下嫂	稲澤えい子	○
143	3	5	1903	明治36	4		家庭	松前子爵夫人の平生		○
144	3	5	1903	明治36	4		家庭	三輪田女史の平生		○
145	3	6	1903	明治36	5		江湖	女子教育時言		○
146	3	6	1903	明治36	5		家庭	姑に仕える秘訣	水原翠香	○
147	3	6	1903	明治36	5		修身	教訓文反古	塚越停春	○
148	3	6	1903	明治36	5		修身	貞烈婦女かがみ	●井福子	○
149	3	6	1903	明治36	5		雑録	婚姻のはなし	戎焉法学士	○
150	3	6	1903	明治36	5		雑録	家庭学校參觀記	勝間舟人	○
151	3	6	1903	明治36	5		雑録	大阪女学界の記	溪流女史	○
152	3	6	1903	明治36	5		彙報	盲啞婦人の遊説		○
153	3	6	1903	明治36	5		彙報	水口実業学校		○
154	3	6	1903	明治36	5		彙報	外国語学校講演会		○
155	3	7	1903	明治36	6		論説	夫婦に独立	記者	○
156	3	7	1903	明治36	6		家庭	姑に仕える秘訣	水原翠香	○
157	3	7	1903	明治36	6		家庭	独逸人の家庭	稲澤英子	○
158	3	7	1903	明治36	6		史伝	会津戦争と婦人	無名氏	○
159	3	7	1903	明治36	6		史伝	ナポレオンの母	本田たづ子	○
160	3	7	1903	明治36	6		雑録	泰西婦人風俗	三枝みつば	○
161	3	7	1903	明治36	6		雑録	看護婦社会		○
162	3	8	1903	明治36	6	姫百合	史伝	武家時代の女訓	須藤求馬	○
163	3	8	1903	明治36	6	姫百合	課題文	女子と交際	小山松枝	○
164	3	8	1903	明治36	6	姫百合	課題文	女子と交際	岡崎亀鶴子	○
165	3	8	1903	明治36	6	姫百合	課題文	女子と交際	加川一枝	○
166	3	8	1903	明治36	6	姫百合	課題文	女子と交際	弥生子	○
167	3	8	1903	明治36	6	姫百合	課題文	女子と交際	ゆづる	○
168	3	8	1903	明治36	6	姫百合	課題文	女子と交際	なでしこ	○
169	3	9	1903	明治36	7		論説	家庭と快楽	三輪田真佐子	○
170	3	9	1903	明治36	7		論説	女子教育時言	井深花子	○
171	3	9	1903	明治36	7		論説	婦女雑感	大町桂月	○
172	3	9	1903	明治36	7		談叢	支那婦人の寄宿舎生活		○
173	3	9	1903	明治36	7		社交	貴婦人の嗜好	中村鈴子	○
174	3	9	1903	明治36	7		雑録	福井の婦人	中村諦梁	○
175	3	10	1903	明治36	8		論説	婦女雑観	大町桂月	○
176	3	10	1903	明治36	8		家庭	細君の処世法	水原翠香	○
177	3	10	1903	明治36	8		家庭	母親の感化	茅原蘭雪	○
178	3	10	1903	明治36	8		社交	貴婦人の嗜好	中村鈴子	○
179	3	10	1903	明治36	8		小説	美術家の妻	江見水蔭	○
180	3	10	1903	明治36	8		雑録	寺子屋の話	菅原雅輔	○
181	3	10	1903	明治36	8		雑録	婚姻の話	戒為散士	○
182	3	10	1903	明治36	8		雑録	外人見たる華族女学校		○
183	3	11	1903	明治36	9		社交	貴婦人の嗜好(毛利公爵 母堂岡部千爵夫人)	中村鈴子	○
184	3	11	1903	明治36	9		社交	当代名流の家庭	勝間生	○
185	3	11	1903	明治36	9		家庭	母親の資格	研月会	○
186	3	12	1903	明治36	9	花すゝき	評論	婦女小言	池田秋旻	○

整理 No.	卷	号	出版 年	年 元号	月	増刊号名	項目名	記事名	筆者	目次 掲載
187	3	12	1903	明治36	9	花すゝき	泰西名什	支那の少女	長谷川天溪	○
188	3	13	1903	明治36	10		論説	女子と理科学	寺田勇吉	○
189	3	13	1903	明治36	10		社交	貴婦人の嗜好	中村鈴子	○
190	3	13	1903	明治36	10		社交	婦人と言葉遣い	江原素六	○
191	3	13	1903	明治36	10		科学	英語実習	藤生貞子	○
192	3	13	1903	明治36	10		雑俎	盲啞婦人ケラー嬢		○
193	3	13	1903	明治36	10		雑俎	二葉幼稚園		○
194	3	14	1903	明治36	11		時論	家庭と学校	安井哲子	○
195	3	14	1903	明治36	11		時論	婦女雜観	大町桂月	○
196	3	14	1903	明治36	11		時論	持参金の目的	記者	○
197	3	14	1903	明治36	11		社交	貴婦人の嗜好	中村鈴子	○
198	3	14	1903	明治36	11		家庭	未亡人の処世法	水原翠香	○
199	3	14	1903	明治36	11		家庭	歩き方と品格		○
200	3	14	1903	明治36	11		家庭	西洋交際のをり		○
201	3	14	1903	明治36	11		談叢	婦人と意匠	意匠会員	○
202	3	14	1903	明治36	11		実務	新婦と家事	棚橋絢子	○
203	3	14	1903	明治36	11		実務	職業と結婚	田辺信	○
204	3	14	1903	明治36	11		学問	学問と注意力	津田信雄	○
205	3	14	1903	明治36	11		学問	英語実習	藤生貞子	○
206	3	14	1903	明治36	11		雑纂	女子と財産問題	SM生	○
207	3	14	1903	明治36	11		雑纂	女子と徳育	岸本宗道	○
208	3	14	1903	明治36	11		彙報	第一高等女学校落式成		○

表から、第1巻では、『女学世界』（傍点は筆者）という名称に沿った女子の学校教育情報を中心に扱っていたことがわかる。

興味深いのは、「女子大学」や女子の高等教育に関する記事が見られることである。先述したように、我が国はこの時期によく女子中等教育が制度化されたにすぎず、しかも当時の制度を構想した側の意図としては、それが女子の「高等」教育であった²¹。しかしながら、創刊年の第1巻中だけでも、「欧米女子大学の形勢」（第3号）、「女子大学校主旨規則」（第3号）、「女子大学参観記」（第6号）、「米国女学生の自活」（第12号）、「女子大学生調」（第16号）と、5本の「中等教育以上」の「高等」教育に関する記事が掲載されている。内容は、欧米の女子大学情報の紹介となっている。ちなみに、「女学士」（第8号）、「模範の女学士」（第16号）は、日本の高等女学校を卒業した女性についての記事であり、前者は、高学歴をもつ女性を主人公とした小説であり、たとえ高学歴をもつ女性であっても読者とかけ離れた存在ではなく、同じような悩みを抱えているのだということがわかるような、読者の共感を呼ぶことができる内容となっている。また後者は、「女学生たるものは、その学校生として、即ち単純なる学生の資格において、学力及び品行上の模範を示すに足るのみならず、学校以外においては、家族の一員たる女子として、一家の幸福を円満ならしむることに助力せざるべからず」とし、学歴を得ても、「家」の中における妻・母としての役割を全うするべきだと示されている。

第2巻からは、高等女学校卒業後の「当たり前の進路」として想定されていた「主婦」に

ついでの記事が見られるようになる。その主婦像は、学歴を得ることでの新しいキャリアが提示されているものではなく、夫や家を精神的に支える妻像であった（「主婦の心得」（第2巻16号）、「美術家の妻」（第3巻4号）、「姑に仕える秘訣」（第3巻6号・7号）など）。また、「職」については、職場に通勤して給与を得るような後に登場する「職業婦人」ではなく、内職をして、家計を助ける妻像であった（「婦女子の内職」（第2巻14号）、「婦女内職のしをり」（第2巻16号）、「婦人の煙草賃巻」（第2巻16号）など）。

2. 創刊当初に標榜されていた女性像

前節において、女性のさまざまなキャリアデザイン情報が提供されていながら、結局は「家」の枠の中に留まることを当然視するような記事が多かったことが確認された。一方、編集者側はどのような女性像を標榜していたのかをあらためて確認しておきたい。

例えば、創刊号の巻頭記事である西村茂樹による「女子の三大育に就て」をみよう。西村は、これからの日本の女性のあり方について、漢学者が主に唱えてきた「女大学主義」は、「理屈に於て賛成なるも實際は到底之を行ふ能はざるを以て遺憾ながらも之を見棄てざるを得ざるなり」と述べる。一方で、西洋を「お転婆主義」と呼び、その考え方に従えば「女尊男卑」になると警告しつつ、「東西各その長所と短所あるを以て予は是の東西の両極端を調和せむとの意見を平生より懐抱せるもの、その調和の仕方は己れの一身を修むるは古来東洋に有せる孝行、貞節、従順の三ヶ條にて可なり」「凡そ女子の徳義にて最も必要なるは一家の平和を計ることにして其他は殆ど見るに足らずと為す点なり」と説く。

また、学校における女子教育については、「上流」と「中流以下」に分け、前者には「美術風（＝音楽抹茶插花等）」をも教え、後者には「専ら実用的のことを仕込」まなくてはならないとする。前者後者ともに「生徒としても女房としても主として裁縫割烹を教えざるべからず」と言うが、特に後者の生徒には力を入れなくてはならないと述べる。さらに、両者が知らなければならないこととして育児と看護をあげている。育児については、子を産んでいない女性が、西洋の翻訳本の知識で教えるのは害を及ぼすかもしれないとまで指摘する。しかし、看護についても同様なことが言えるものの「看護法」については、「別に資格を論」じなければならないとも述べている。さらに、「体育」も大切だと指摘し、卒業後には運動不足から病身になることがあり、舅姑と同居する家に嫁いだ場合には問題であるので、今後考えていかねばならないという。総じて、西洋の教育をいたずらに模倣してはならぬと説いている。

西村は、当時の高等女学校制度の確立期に盛んに文部大臣などが用いていた²²「良妻賢母」という語句は用いていないものの、学校教育を受けるとしても、その内容は家庭において妻となり、母となり、舅姑に仕えるときに実用的なものでないとならないと述べており、「家」における妻、母に帰着した女性像を求めている。西村の経歴²³に照らしても、こうした論調は自然なものと受け取れるであろう。先に紹介した「発刊の辞」とあわせてみると、『女学世界』は当時の高等女学校の教育目的として掲げられた「良妻賢母」の養成と、

家制度にかなう女性像を打ち出していたことがわかる。

第3章 具体的なキャリアデザイン情報

1. 職業への開眼—欧米の例を用いて勧めるもの

一方、専門的な「職業」に関わる記事が最初に登場するのは、第1巻第10号(1901年8月)であった。職種は、「婦人記者」であり、女性の特質にかなう職業であること、また欧米の女性記者の例を紹介し、我が国にも女性記者が多くなっていくことを望んだ記事であった。以下に引こう。

社会の文明の進歩すると共に、婦女子にも職業の必要を感じるに至るものである、従って婦人の働くべき範囲は広まり、或いは慈善事業、或いは教育事業等種々あるべきしと雖ども、新聞雑誌の記者となるば如きも、確かに文明婦人に適当なる職業であると思う。(中略、筆者) 女性てふ婦人固有の特性は、男子の能はぬ働きを為し得るも、殊に記者としては、男子は社会の表面上の事柄には通曉し得べきも社会の裏面に於て、世態の真相を精察し、人情の神秘を透見するは婦人たる者の所謂女性の作用に持つもの多きを以て、記者たるの職業は、男子の手腕を要すると共に、又た婦人の特性的能力を必要とするものであらうと思う。(中略、筆者) 吾人の見る所では、新聞雑誌の記者となるは、教育あり、能力あり、且つ一身の自由なる婦人に在りては、最も適当なる文明的職業であらうと思ふ、而して又た婦人の手を借りて所謂「女性によりて観察せられたる社会」を紹介せられなば、社会及び民人は、如何に莫大の効益を享くべきやと思ふ、故に吾人は、有為の気と実力ある婦女子にして、進んで記者となるもの多からんを望むのである。

くだって1904(明治37)年第4巻14号の「婦人と新聞記者」には、アメリカの例を引き、女性の新聞記者の活躍を紹介している。先の記事と同様、女性のほうが男性よりも性質として多くの同情心を持ち、誠実、綿密、周到であり、会話が長く、会話体の文章にも強いことから新聞記者にふさわしいと述べ、さらなる女性の新聞記者の活躍を喚起するものとなっている。

先の女子大学に関する情報と同様、こうした欧米の例を示しての記事は、読者にとっての憧れを抱く存在となっていたとも考えられる。『女学雑誌』の巻頭グラビアのページには、往々にして欧米の貴族写真や景色の写真等も用いられていたことも留意したい。

2. 学校教育と職業

『女学世界』が創刊され2番目に「職業」という用語が含まれている記事は、第2巻3号(1902(明治35)年3月)に登場する文学博士・上田萬年による「論説」の「女子の(手に歸すべき)職業」である。男性が担っている職業のうち、男女ともに担えるもの、また男性に劣らずに

女子が担えるものが少なからずあるとイギリスにおける郵便電信事務の例を示して主張している。ただし、女子が男子の代わりに職業を担うためには、「善き教育」と「訓練」を受けることが必要であると示されている。

女子教育盛に行われて、女子の知識技能愈々進み、女子の社会に於ける位置。漸次高まり行くと同時に、在来男子の専有せる職業にして、女子の専有に帰すべきものよし専有に帰せずとも、少なくとも男女の共有となるべきもの、決して少しとせざるべし。(中略、筆者) 女子にして善き教育を受け、能く訓練せらるる時は、決して男子に劣るものにあらざることは、今や争ひがたき事実となれり。こは単に以上の如き天才の女性の上へのみ止まらず、普通に教育を受けたる、普通的女子が社会に立つ上に於ても、亦然らざるを得ざるなり。(中略、筆者) 予輩は茲に英国が郵便電信事務の上に於て、女子を以て男子にかへたる一実例を報告すべし。(中略、筆者) 現に日本橋郵便局には女子を使用せり、日本銀行にても女子を使用せり、印刷局には猶いっそう前より女子を使用せり、比較的後に設けられたる電話交換局にても女子を使用せり、貯金事務に於て、電信事務に於て、普通郵便事務に於て、女子を使用しあたはざる理由何処にありや。(中略、筆者) 婦人三従の時代は既に業に去りぬ。勉めよや、学べよや、かせげよや、而して自ら治めよや。女子は男子に頼らずとも、其幸福を享有し得べきなり。

実際、この記事より3年前の1899(明治32)年、女性の新しい職業として初の女子の電話の交換手が登場しており、電話交換手は、にわかに女性の専門職として位置づいて行く。またその翌年の1900(明治33)年には、逓信省が初の女子採用を行なってもいる²⁴。

こうした社会の動きもあってか、女子が適切な専門教育を受けた後、それを活かして職業に就くことを勧めている記事はすぐに登場する。同年(1902(明治)35年7月)2巻9号には、金沢商業学校の土屋長吉による「雑録」に「女子職業と簿記」という項目が含まれている。そこでは、銀行、会社、商店における女性簿記者の可能性について述べられている。学校教育を受けた後に結婚というコースを進まず、まずは卒業後に働く道を示したのものとして新しいライフコースの提示がなされた記事である。文脈からは、当時の女性たちが商業界で働くことについて躊躇していたことも推測できるが、執筆者は、商業学校で身に付けた知識を活かしてほしいと願っている様子も見て取れる。

未だ銀行、会社、商店等に於て簿記方として、女子を採用すべしとの説行はれざるは予輩の甚だ不思議に関する所なるを以て、茲に一言を述べて女子の簿記方に適すると、及び女子を採用するの利益多きとを明らかにせんと欲す、但だ有夫の女子に此等の職業を執らしむるは或は弊害の伴はん恐れあれば、今は暫く未婚の女子に就て観るべし。(中略、筆者) 最後に我が国商業道德●廃は種々の方面に誤解を生じ、殊に貞操を重んずる女子の如きは甚だ斯かる社会に入ると恐るならんも、似而非ハイカラーは存外商業界に少な

く、又某新聞が某氏を攻撃せるが如きとは信用を以て成立する商業社会には稀有の事なれば、無用の杞憂に過まらることなく奮励一番盛んに簿記の研究に従ひ、予輩の説述せる方向に進み以て我経済界に貢献する所あらんとを世の女子諸君に希望して已まず。

さらに時代が下って、1906(明治39)年には、学校教育を受けたことが、職業に就いた際に必ずしも役に立つものではないという声が女性たち自身から上がってくるようになる。「わが職業の体験」(第6巻7号)には、女学校卒業後の会社への就職はとにかく「忍耐」であるといい、仕事に重用されれば、男子にねたまれることもあると指摘し、学校教育がすぐには役立たないと指摘する。また、塚本はま子も同号の「主婦の学問」の中で、学校教育はすぐには成り立たず、学識と実際とが相俟って、初めて完全なものになると述べている。

この時期、日露戦争によって寡婦となり、戦後の不況により夫のサラリーの減少等に直面するなど家事経営に影響を受けた女性たちは、生活難から自立するための技能・職業教育を求めていった。他方、裁縫と家事が教育内容の中心であった高等女学校の教育を受けていた当時の女性たちの中にも、裁縫は家事経営に実効をなさないことを指摘し、卒業後に良縁を求めるのではなく、上級学校への進学を希望するものが増えてきたのもこの頃であった。

3. 女性の立場の違いによる職業選択

1902年9、10月に発行された『女学世界』には、女性の複数の職業紹介記事が登場する(「婦人と職業」(第2巻11号)、「職業と職業(三)」(第2巻13号)²⁵。電話交換手、看護婦、保母、女教師、貸本業、産婆、煙草店が女性のどういった立場の人に向いているか、仕事のやりがい、賃金はいくらかが中心に紹介されている。なお、このほかにも、新聞記者、小説家、裁縫が女性の仕事として存在していることを指摘し、後日に稿を譲るとしている。紹介された7種をみてみよう。

- ① **電話交換手**「一家の妻君となつてからは出来ないのは此電話交換手で畢竟処女時代の職業というべきである」
- ② **看護婦**「広き意味に於ての慈善事業である。天賦の優しく、暖かい性質を有つてゐる女子諸君の、正に歡んで就くべき職業ではあるまいか。」「一ヶ月七円から十五円迄の収入は必ずある」
- ③ **保母**「保母乃ち高等子守で、良家の家庭に雇はれて専ら子女の養育係となる一種の家庭教師である。」「『高等』という二字はあつても子守といふ名の付くからはその耳に怪しい響きを与えて、忽ち連想されるのは従来 of 卑しい子守であるば、茲に余輩の、女子の職業として紹介する高等子守なるものは去る不見識な、卑賤なるものではない。西洋各国の課程で盛んに行はれつつある最も高尚な、最も神聖なる職業としてのガバテアス(保母)乃ち是れ!」
- ④ **女教師**「女教員(茲には小学校の教員をいふ)もまた光明あり、光榮あり、希望ある

ものの職業の一つで、其神聖なることは決して前述のカバテアスに譲らない」

- ⑤ **貸本業**「是れは処女の遣るべき職業ではない。良人は勤人の居間は大概留守勝であるから、その相間を見て、妻たるべきものの唯遊んでいてはと冥利を考へての営業で、身生持の身体には余裕のある人には適當の事業である」
- ⑥ **産婆**「同じ職業の中でも此位小面倒臭いのは少かろう。」「言ふに言われぬ楽しみのあるもので、生まれて来るものは何れも未来に大いなる光明と大いなる希望と大いなる生命とを有って出て来るのだから、それを我が手に掛けて現世へ出すのだと思ふと一種の楽しさが胸の裡に漲って来る」
- ⑦ **煙草店**「茲には『貸本屋』と同じて妻君の片手間にするのを言ふのだから、極く、小さい小売のことを紹介するまでに止て置く」

確かに、この時期にはすでに看護学校や、看護婦養成所も設立されて久しく、女子は軍人になれずとも、従軍看護婦になれることは当時の人々に一種羨望の目で見られたという。また産婆は、1899(明治32)年に女子医学校創立の際に、産婆の規則も制定され次第に近代的な職業となつていった。²⁶

その後、1906(明治39)年の第6巻3号に、女子商業学校学監・嘉悦孝子が同じく「婦人と職業」というタイトル名で稿を寄せている。そこには、職業に貴賤の隔てはないと前置きした上で、学校卒業後に結婚をしない(嫁に行かない)女性に実業家のもとで事務員となることを促している。その理由として、事務員をすることで経済上の知識を得ることができ、それらの知識が結婚後の生活に役に立つことをあげている。

加えて、高等工業学校長の手島精一は、「女子と職業」(第6巻4号)において、男性と女性が同等の地位を得ていないことによって、一家の快樂にも欠け、一国一社会の調和にも欠けるために、女性の職業の拡大、および賃金面におけるの地位向上の必要を主張している。そのため、女子への教育の必要性を説いているが、あくまでも女子教育は、男性のためのものであると位置づけている。

翌月の第6巻5号において、同様のレトリックで女子の教育の重要性を述べているのは、共立女子職業学校長の中川謙二郎である。中川は「女子の職業」において、家事以外の職業を持たないのはよくないと述べ、教育を受けた豊かな子女こそ職に就く必要があると主張する。しかし、女性が就くべき職業は、男性の行なっている職業である必要はなく、男性の仕事に妨害せず、それを助け、ともに活動する意識が大切であり、それをもって初めて国家の発展を見るといふ。

以上のように女性たちにとって、未婚か既婚かによって職業選択の際に職種が制限されること、また、男性主導の社会における職業選択に止まっていたのは、家の存在がその前提にあったからであろう。

むすびにかえて — 今後の課題 —

本稿では、『女学世界』を書誌的に概観するとともに、創刊初期のキャリアデザイン情報記事に着目し整理した。

女性の役割を妻・母としての「家」の中における役割に限定し、しかもその妻・母としての役割を通して国家への貢献を期待されていた時代に、女性たちは自ら義務教育段階以上の教育を欲求し、また、その教育内容についてもさらなる専門性を求め、裁縫や家事にとどまらない高等な教育への欲求を高めていった。学校教育を終了後に、結婚、出産というライフサイクルをたどるのではなく、結婚するまでは職に就くという選択肢が登場し、自らのライフコースを選択できる可能性を持つようになった。しかしながら、基底には良妻賢母思想があり、職業は結婚までという限定がついていた。一方、産業化の進展により、職業の種類や就業の機会は拡大し、女性たちもまた単純労働であった内職や女工といった職ではなく、実業教育を経て、一定程度の専門性を必要とする職業へのアクセスを可能にする者も登場した。他方、戦争によって夫を亡くし、また不況から経済的困窮に陥り、経済的自立のために単純労働を中心とした職業にアクセスせざるを得ない女性たちもいた。

女性自らがキャリアデザインをしていく上での選択肢が見えつつあり、それらの選択肢にアクセスが可能であることを、『女学世界』の創刊当初の記事は読者の女性たちに教えている。ただ、その選択権が女性本人にはない状態に女性たちは悩み、葛藤する、そうした思いが小説記事等には表れている。本稿では紙面の都合上まったく触れることができなかったが、第2報以降では、キャリアデザインのためのさらなる選択肢が増え、アクセスがよりしやすくなっていく時代背景の中で、女性たちが何を考え、悩んでいたかについても、記事を追いながら検討していきたい。

本研究は、平成19～22年度科学研究費補助金基盤研究（研究種目（B）一般）「近代日本人のキャリアデザイン形成と教育ジャーナリズム」（研究代表者 菅原亮芳）（課題番号19330177）における研究成果の一部である。

参考文献

- 深谷昌志『良妻賢母主義の教育』、黎明書房、1966年
福地重孝『近代日本女性史』、雪華社、1977年
女性史総合研究会〔編〕『日本女性史 第4巻 近代』、東京大学出版会、1982年
小山静子『家庭の生成と女性の国民化』、勁草書房、1999年
小山静子『良妻賢母という規範』、勁草書房、1991年
三好信浩『日本の女性と産業教育 —近代産業社会における女性の役割』、東信堂、2000年
水野真知子『高等女学校の研究 —女子教育改革史の視座から—（上・下）』（野間教育研究所紀要 第48集）、野間教育研究所、2009年

村上信彦『明治女性史 中巻後篇 女の職業』、理論社、1971年
牟田和恵『戦略としての家族 近代日本の国民国家形成と女性』、新曜社、1996年

注

- 1 小山静子『女学世界 明治期復刻版 解題』柏書房、2005年、2頁。なお、本稿での書誌的情報については、小山によるこの解題と、吉沢千恵子「『女学世界』婦人総合雑誌」『日本の婦人雑誌 解説』（中寫 邦〔監修〕）、大空社、1986年に拠っているところが大きい。
『日本の婦人雑誌 解説89～92頁。
- 2 女子向けの進学案内書には、時代が下るにつれて、職業に結びつくような各種の学校紹介部分が増大している。樽松かほる・野坂尊子「女子進学案内書みられる進学・学校選択・キャリア情報」『受験・進学・学校—近代日本教育雑誌にみる情報の研究』学文社、2008年。
- 3 同上。
- 4 本稿で使用する「キャリアデザイン」とは、菅原の定義した「自己の発見とライフサイクルの理解、家庭、学校、地域という外部環境の理解を通して自らの生き方の表現と将来設計を行う姿勢・能力や見識を指す。」を用いる。（菅原亮芳「近代日本人のキャリアデザイン形成と教育ジャーナリズム（1）—研究計画・大日本国民中学会・『新国民』（その1）—」『高崎商科大学紀要』第22号、2007年12月
- 5 山口昌男「明治出版界の光と闇—博文館の興亡」『「敗者」の精神史』岩波書店、1995年、240頁。
- 6 『少年世界』（1895（明治28）年～1933（昭和8）年）、『中学世界』（1898（明治31）～1928年）、『幼年世界』（1900（明治33）年創刊）、『少女世界』（1906（明治39）年～1931（昭和6）年）。
- 7 松原岩五郎については、『最暗黒の東京』岩波書店、1988年の立花雄一による「解説」に詳しい。
- 8 『太陽』は15銭（120頁）、『少年世界』で5銭（120頁）であった。
- 9 『博文館五十年史』博文館、1937年、46頁。
- 10 小山、2頁。（小松菊松『日本出版会のあゆみ』誠文堂新光社、1962年、69～71頁。
- 11 「現代の女学生」（12）「婦人雑誌の解剖」『東京朝日新聞』（1911年4月12日）。また、婦人雑誌の3つの傾向として「その一は、婦人のための味方となりて、婦人の発展向上その他の事に就き、代表的な気焔を高めるもの、その二は第三者の立脚地より、今の婦人を研究し教導し、今の婦人界を批評するものにして、その三は別に何等の主義目的無く、唯女性の好み相な題材を捉へて、興味中心の文字と絵画を並べ、浅間しき女の虚栄心を煽動するものなり。」と述べられている。
- 12 田中牧郎「『近代女性雑誌コーパス』の概要」『言語データベースとソフトウェア』国立国語研究所、2006年。
- 13 永嶺重敏『雑誌と読者の近代』、日本エディタースクール出版部、1997年、172～183頁。
- 14 岡満男『この百年の女たち—ジャーナリズム女性史』（新潮選書）、新潮社、1983年、35頁。
- 15 就学率および高等女学校数・生徒数ともに文部省年報による。
- 16 次第に利潤追求型の商業誌が増加し、文字ばかりの雑誌から口絵・挿絵が入り、口語体となり、ルビがつき、内容的には日常的な実用記事が多く、以後の一般婦人雑誌の原型をつくり始めたという。その始まりが『女学雑誌』であり、『婦人界』『婦人画報』『婦女界』も同種の雑誌であったという。中寫邦「婦人雑誌」『日本女性史大辞典』吉川弘文館、2008年。
- 17 小山、6頁。
- 18 加藤は「後期」（1917（大正6）17巻1号～1925（大正14年）25巻6号）と区分している。

- 19 文部省調査局「中等教育機関への進学率」『日本の成長と教育』(昭和37年度)によれば、女子の進学率は、1895(明治28)1.3%、1900(明治33)年2.7%、1905(明治38)年4.2%、1910(明治43)年9.2%、1915(大正4)年5.0%、1920(大正9)年11.5%、1925(大正14)年14.1%となっている。
- 20 加藤節子「雑誌『女学世界』にみる女子体育」『上智大学体育』第20号、1986年。高橋一郎「女性の身体イメージの近代化—大正期のブルマー普及—」高橋一郎他『ブルマーの社会史—女子体育へのまなざし—』青弓社、2005年。
- 21 例えば、1902(明治35)年に、文部大臣・菊池第麓による全国高等女学校長会議における訓示がある。その中で「日本では此の婦女子と云うものは将来結婚して妻になり母になるものであると云うことは女子の当然の身の成行きであると云う様に極って居るのであります、(中略)我邦に於ては女子の職と云うものは独立して事を執るのではない、結婚して良妻賢母となると云うことが将来大多数の仕事であるから女子教育と云うものは此の任に適せしむると云うことを以て目的とせねばならぬのである」。(三井為友[編集・解説]『日本婦人問題資料集第四巻 教育』、ドメス出版、1977年) それより先の1886(明治19.)年12月、文部省(森有礼文相)は、「高等女学校生徒教導方要項」において、「生徒は高等小学校二箇年の課程を卒りたる以上若くは之に相当する学力あるものを入学せしめ、先ず生徒の職分の基礎となるべき普通学科を教え、尋いで一家の責任を負担するに切要なる学科及び芸能を習はしめ、最後凡一年間は夫婦の関係、舅姑に対する心得、育児法家事整理法、婢僕に対する心得、朋友親戚等に接する心得及交際動作の心得等を講究せしむること。(傍線筆者)
- 日本旧来の女子職分及習慣にして善なるものは愈々之を進め、不善にして改良を要するものは、其尚存在する間は之に和して同ぜず、漸次円滑に其改良を遂ぐるの要旨を教訓すること。」と示している。(『学制八十年史』文部省、1954年)
- 22 註20に同じ。
- 23 1873(明治6)に明六社をおこした。同年、文部省に入り、修身教科書の編纂によって学校教育を通じての徳育復興の第一線に立つ。当時の誤った欧化主義に反対し、国民道徳を強調するに至った。1896(明治9)年に東京修身学社を設立し、1884年には日本講道会とする。文部省を辞して宮中顧問官となり(1886年)、翌年、教育勅語の喚発を促進。その倫理教化運動の精神を宣言したものが「日本道徳論」であった。貴族院議員、華族女学校校長などを歴任。『教育人名辞典』理想社、1962年など。
- 24 宮城栄昌編著『新稿 日本女性史』吉川弘文館、1974年、225～226頁。
- 25 ちなみに、第2巻第12号に「婦人と職業(二)」が存在するように前後の記事タイトルから推測できるが、掲載されていない。
- 26 宮城、225頁。